The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	琳派と雪佳
Author(s)	榊原, 吉郎
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 158-159
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53112
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

琳派と雪佳

榊原吉郎

京都の近代工藝において中心的役割を果たしたのが雪佳であり，その業績を解き明かすことが京都近代工藝の研究に一つの視点を与ることになる。雪佳の生涯は，まさに工藝が近代工藝に生まれ変わる苦しみを示す軌跡そのものである。近世京都が生み出した琳派はこれまで絵画の一流派として捉えられることが多かった。しかし琳派を支えてきた人々は琳派絵画のみを愛好してきたのではなかった。京都人の生活のなかから誕生した工藝の一分野が琳派であったと理解する発表者は，新しい資料をもとに，琳派の後継者とされる雪佳の琳派理解について考察を加える。

新資料は，雪佳が昭和12年春，ラジオ放送に出演し，本阿弥光悦の藝術について論じていた原稿の一部と考えられる記録とその下書き草稿である。これまで雪佳が光悦について発表してきた論文の存在は知られていたが，ラジオを通して光悦の業績を一般世間に知らせていたことは把握されていなかった。

この放送は当然，生放送であり，録音されていない。その実態を再現することが不可能であることは言を俟たないが，大凡の内容は判明する。雪佳が光悦と宗達について理解していた内容が，今日我々が抱く宗達像と大きく隔たっている。

ラジオ放送は，今回の調査で出てきた神阪三郎・冬子宛の書簡の消印により昭和十二年三月九日以前になされたらしく，ＮＨＫ京都放送局から婦人講座の中で，二十五分間にわたって放送されたものである。

私信の中に記された文章であり，完全な放送原稿ではない。しかし，一面では雪佳の光悦理解，さらにいえば琳派に対する彼の理解度を明らかにすることができる資料であることは確かである。

一

欄外　光悦の藝術ハ過日送りました話の間ニはさんで述へま志た左之通りです／私しの放送ハ婦人講座です可ら話しの種を／わかり安く悠々と二十五分間放送を致しました

光悦翁の藝術ハ家業の刀剣技術の以外／の総余技の藝術であります其非凡の意匠家／で又超越志たる藝術家ですあらゆるの作品ハ／自己の見識を以て思ひのままの着想で各種／の製作を楽んだ藝術です可ら誠ニ気持／のよい只今に珍重にのこさ連てあります／工藝ハ御承知とうり各種ありま志て其技術も／中々複雑でありまして，斯如き工藝技術ニ／造詣の深ひ天才の藝術家ハ光悦翁の外には／ありますまひ思ひます／光悦翁ハ豪華と可華美と可を避けま／して光翁の得意の蒔絵の製作にも金銀を

二

ちりばめたる様な作品ハ有りません極めて下等／な鉛と可錫青貝など質素な材料を多く／使用志て居りますこ連ハ翁の大膽と見識の／藝術であります此の質朴な藝術を此時代／に余程もてはやさ連たと云ことハ豊臣時代の／豪華にあきまして質朴な藝術を歓／迎志ましたものと存じますそして光悦翁の如何／なる工藝作品を見ましても全力を津く志た／苦心

の作と云物をいまだ嘗て見うけた事／可有りませんこれハ光悦の天才的着想を／思ひのままに何のよどみも無くすらすらと作り／あげら連た藝術でありますそして何の缺／点もなき技術ハ光悦翁の人格の余韻とでも／申しますでしょう／

三

又光悦翁可三百年のむかしに版画を創作／を志て居ります是連を光悦紙と称志て余／程趣味の深ひものであります此版画作り方ハ只今／版画同様に光悦自己の豪放な筆意／の図を自分可彫刻を志まして摺るのではありませ／ん銀と可キララ其他絵具にて押します／ですから紙に面白い味がありまして趣味のあるものです／ここにめ津らしき光悦翁ののこさ連た物可／ありますそ連ハ厳嶋の国宝の経巻の見返志／の破損の為光悦翁可厳嶋に参りま志て／其失たるを補ひて画きたる槙ニ水秋草に／鹿の図であります其図ハ光悦独特の筆格／ありまして其色彩等ハ納経当時と殆ど其調を／一にしてまた意匠の斬新なところ誠に結構で／あります

四

又鷹ケ峰の光悦翁配下の工作者と云／人々に就て一寸申します／鷹ケ峰ニ光悦翁可う津りますと同時に光悦／邸宅のまわりに配下の工作人可光悦より家を／あたえら連て多人数居りました其内判然志て／居るのハ紙師の宗治こ連ハ光悦の使用紙を造る人／筆師妙喜ハ翁の使用の筆を造る人其外ハ／土をこねると可漆をぬると可金物師其他色々此人に／ハ光悦の助手可と存じます此内にも相当な技術／者居りま志たことと存知ます光悦工藝藝術ハ／此鷹ケ峰で多く製作出来たのであろふ／かと存じます私しの御話ハ是で終ります

雪佳は光悦が秋の宮島を訪ね，国宝の平家納経の見返しの修復をしたと，理解している。今日，この修復に参加していたのは俵屋宗達である，ということが定説となっているが，昭和初期の時点では宗達研究が進んでいなかったことをこの放送原稿が教えてくれる。

（註）

・神坂三郎宛書簡　一通

宛先は「東京市杉並区阿佐ケ谷六ノ一四七　神坂三郎様　冬子様」と連名の宛名になっており，三月九日と差出日が記され三銭の切手の消印は三月九日となっている。

この三郎・冬子宛の書簡は毛筆で，和風用箋五枚にわたって記されており，吉雄家の和風用箋と同じものが用いられている。放送内容の骨格を示しており，話の展開を辿ることができる手がかりと考えている。五枚のうち始めの四枚に放送原稿が記され，残る一枚には三郎の容態を気遣う私信である。書き起しは放送原稿に止める。

なほ本資料は，今回の神坂雪佳展のために調査をされた京都国立近代美術館の池田さんから提供されたものである。